

レファレンス コーナー 南アジアについて 調べる・学ぶ

東川 繁

「南アジア」(South Asia)は、人口の多い順にいうと、インド、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、スリランカ、ブータン、モルディブの七カ国からなる。これは最も一般的な理解である。国連の地域区分(Southern Asia)ではアフガニスタンとイランも含まれている。

この地域のなかで、インドは総面積の約七三%、総人口の約七六%を占めており、その存在は圧倒的に大きい。そのこともあってか、南アジアという表現をしていても、実際にはインドが中心で、他に「ないし」二カ国だけを取り上げているような場合が少なくない。しかしながら、この地域全体について学んでみたい、あるいは地域内の比較をしてみたいというかたもおられるであろう。そこで、ここでは南アジア全域を対象とした邦語文献を取り上げ、紹介してみよう。なお、時期的にはここ数年

間に刊行されたものに限定した。

まず、初学者を対象とした簡潔な地域研究案内として、吉田昌太郎「地域研究入門―世界の地域を理解するために」(古今書院 二〇〇二年)所収の佐藤宏「南アジア―歴史に育まれた多元的社会」がある。この地域について学ぶための最低限の指針が手短かにまとめられている。

参考図書として次の二点をあげておこう。事典には辛島昇等監修「南アジアを知る事典(新訂増補)」(平凡社 二〇〇二年)がある。初版は一九九二年の刊行。一〇〇〇ページを超える大部のもの。項目編、地域編、増補項目編、資料編からなる。項目数は約一七〇〇。増補項目数は約八〇。地域編、資料編も必要な改訂を施してある。地理では「インド・南アジア(ベラン世界地理体系 二二)」(朝倉書店 二〇〇七年)がある。フランスの定評ある世界地誌シリーズの一環。地理の専門家とフランス語の専門家が共同して翻訳している。

『現代南アジア(全六巻)』(東京大学出版会 二〇〇二～二〇〇三年)が広範な社会科学領域を扱っている。これは四年間の共同研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」(文部科学省科学研究費特定領域研究A)に基づく最終成果を出版したものである。一部外国人研究者を含む八〇名近い南アジア研究者が寄稿している。日本における南アジア研究の水準を示すものといつてよ

からう。全体を見て卒業論文のテーマを探す、自らが関心を持つ分野の論文を熟読する、などいろいろな利用方法があろう。全巻の構成は次の通り。第一巻「長崎暢子編」地域研究への招待」、第二巻「絵所秀紀編」経済自由化のゆくえ」、第三巻「堀本武功・広瀬崇子編」民主主義へのとりくみ」、第四巻「柳澤悠編」開発と環境」、第五巻「小谷江之編」社会・文化・ジェンダー」、第六巻「秋田茂・水島司編」世界システムとネットワーク」。平均三五〇ページ。

経済関係では河合明宣・浜口恒夫編著「持続的發展と国際協力」(財団法人放送大学教育振興会 二〇〇三年)がある。本書は通信制大学である放送大学のテキスト(同大学では印刷教材と称している)として出版されたものである。南アジア諸国の経済発展、社会開発の現状と課題を概観し、望ましい開発戦略および国際協力のあり方を展望する。書名に南アジアの文字はなくページ数も多くはないが、七カ国全部を取り扱っているのが特色の一つである。歴史関係では次の三点が新しい。辛島昇編「南アジア史(新版世界各國史七)」(山川出版社 二〇〇四年)はインドに関する記述が大半を占めているが、特に編者の専門の関係で南インドについて詳しい。他の諸国に関しては最終章の半分が充てられている。内藤雅雄・中村平治編「南アジアの歴史―複合的社会的歴史と文化」(有斐閣 二〇〇六年)も

やはりインドが中心。他の諸国は、補論(南アジア地域協力連合(SAARC)、インド系移民) およびいくつかのコラムが取り扱う。「南アジア史(世界歴史大系全四巻)」(山川出版社 二〇〇七年)は、現時点で第三巻まで刊行されている。構成は、第一巻「山崎元一・小西正捷編」先史・古代」、第二巻「小谷江之編」中世・近世」、第三巻「辛島昇編」南インド」、第四巻「長崎暢子編」近代・現代」となっている。平均五〇〇ページ。

定期刊行物としては「南アジア研究」(日本南アジア学会編集・発行)がある。年刊で、第一号(一九八九年)から第一九号(二〇〇七年)まで出ている。人文科学、社会科学双方の領域を対象としている。外国人執筆者、日本人執筆者が英語で書いた論文、書評も少なくない。

最後にユニークな本を紹介しておこう。大橋正明・五十嵐理奈「インド・スリランカ・ネパール・パキスタン・バングラデシュ・ブータン・モルディブ(日本とのつながりで見えるアジア)過去・現在・未来―五」(岩崎書店 二〇〇三年)。本書は、小学校高学年を対象として日本との関係を軸に南アジア諸国についてやさしく解説したもの。わずかに六七ページの薄いものだが、書名のとおり七カ国全部を取り上げている点で面白い。索引も付されている。

(ひがしかわ しげる/アジア
経済研究所図書館)